

2025.4.29 その子なりの世界のひらき方

先週、年中児二人がダンゴムシを捕まえて遊んでいました。次の日、教員も一緒に入り、空き箱でダンゴムシのお家を作ります。ダンゴムシを捕まえたR子は家から人參など餌を持ってきていて、作ったダンゴムシの家に入っています。その様子を横で粘土していたM子がじっと見ていました。

その次の日、そのR子らのお家を見て、隣でS子らも空き箱などを使って大きなダンゴムシの家を作り始めます。S子らは「入り口はどうする?」「廊下をつけてみる?」など相談しながら、お家はどんどん大きくなっています。S子らがお家を作っているのをまた横で見ているM子。そして、その横で空き箱を使ってお家を作り始めます。S子らとのやりとりは特にありません。

M子はかわいいお家にしたいようで、中にカラーセロハンをつけたり、紙粘土で形作ったものを入れたりとしています。M子なりのこだわりも見えてきます。

一方S子らはお家ができると、ダンゴムシを捕まえてきて入れていきます。そして、他の子供たちも集まってきて触ろうとするので、「やさしくさわってね」「みるのはいいよ」「そとにださないでね」と紙に書いて、お家に貼りだします。そのことをみんなの時間で全体にも紹介をしました。

M子はお家ができ、ダンゴムシを入れるのかなと教師は見ていると、ダンゴムシを入れようとはしません。実はM子はダンゴムシを触れません。苦手なのです。教師もその時初めて気がつきます。

その次の日、M子はまたダンゴムシのお家をアレンジしていきます。教師は「Mちゃん、ダンゴムシ一緒に探しに行く?」と聞くと、コクンとうなづきます。ダンゴムシを見つけ、教師がかわりに捕まえると、M子はちょっととダンゴムシを突っついでみます。そして、一緒にいた友達にダンゴムシを家に入れてもらいました。

M子は「お水をかけてあげたほうがいいかな?」とカップに水を入れます。「でもこぼれたらお家がべたべたになっちゃう」「きりふきでちょっとだけかけようかな…」いろいろ考え始めます。その日の昼遊び、M子も紙に約束ごとを書き、貼っていました。

その次の日、登園するとすぐにダンゴムシのお家を見に行くM子。

「あれ? ダンゴムシいない。」よじ登ってでていったのかもしれません。

M子は「おうちが小さいから嫌なんかなー、もっと大きくしてあげよう」と空き箱をさらに持ってきてリフォームを始めます。その様子を見ていたK子もその横でダンゴムシのお家を作り始める姿も見られました。

自分なりに少しずつ世界をひらいていこうとするM子の姿を尊く感じました。

もともとダンゴムシが苦手だったM子。しかし、「ダンゴムシのお家」というところから「ダンゴムシの世界」にじりじりと近づいてきます。ダンゴムシというよりも「手作りお家」に惹かれたのかもしれません。

そこには年中さんらしい、ごっこ遊び的な、ファンタジー的な発達段階も感じます。

周囲の子のやっていることがM子の発意のきっかけにもなっています。自分ひとりだけの世界じゃなく、他者へ興味が広がっていく年中さんらしさも思います。自分のもともとの興味・関心も相まって、別にその子たちと絡むわけではないけれど、場を共有していく中でその面白さが伝播していきます。

ここまでM子はダンゴムシを「好き」になったわけではないと思いますが、出会うきっかけは人それぞれなんだと感じます。それと同時に、その世界をひらくきっかけもひらき方も子供たち一人一人違っていて、その姿を大切にしていきたいと思います。M子はお家作りからダンゴムシに出会い、ダンゴムシの死の経験、触ることでダンゴムシの体の質感や動きなどにも気付き、またそれが新たな出会いと気付きを生み、それらを幾重にも重ねながらこの先ダンゴムシを「好き」になっていくのかもしれません。もしかしたら、お家作りの方に興味が広がり、そっちを「好き」になるかもしれません。その展開の可能性は無限です。そこと一緒に探っていくこともワクワクします。いろいろな世界に足を踏み入れながら、いろいろ面白い世界はあるけれど、その中でも自分なりの好きを見つける。そのような経験を子供たちに保障していきたいです。

